

【寄稿論文】

他人の配偶者の新呼称を探るアンケート調査 —「ご主人」「奥さん」から「夫さん」「妻さん」への移行の可能性—

水本光美

要旨：

配偶者の呼称に関するアンケート調査に基づいた代表的な先行研究は、大方が自身の配偶者を言及する場合のものであり、他人の配偶者を言及する場合の研究は極めて少ない。本研究では、先行研究の調査結果と独自に実施したアンケート調査結果を比較分析し、自身の配偶者の呼称に関しては、旧来の「主人・家内」より「夫・妻」を用いる人の方が多くなってきたことを報告する。また、今までなされていない他人の配偶者の呼称に関する調査結果から、ジェンダー・ニュートラル(gender neutral)な「パートナー」や「(お)連れ合い」は、文脈によっては誰のことを言及しているのか理解しがたい面があることがデータによって明らかにされた。それに反し、新呼称「夫さん・妻さん」は馴染みのない表現である故、その語を使う違和感があることは明らかになったが、意味理解に関する誤解は生じないため、現実的にネット上では多くの使用例が見られる。その将来的可能性は大いに期待出来るだろう。

キーワード

配偶者の呼称、他人の配偶者、ご主人、奥さん、夫さん、妻さん

1. はじめに

1. 1 「ご主人」「奥さん」の代替語

90年代初頭にアメリカの大学で日本語を教えていた頃、学生から出る代表的な質問の一つに配偶者の呼称があった。日本語では一般的に、自身の配偶者を「主人」「家内」と呼び、他人の配偶者を「ご主人」「奥さん」などと呼ぶことに関し、女性蔑視の“差別表現”であるとの批判的質問であった。それから30年近く経た現在、日本社会における配偶者の呼び方は、どれほど変化したのだろうか。

90年代にアメリカから始まったジェンダーに配慮したPC(Political Correctness)的な言い換え表現は、日本でも今世紀に入って政府主導の下で推奨され、それまでの「看護婦、看護師」が「看護師」へ、「スチュワーデス、スチュワート」が「客室乗務員」へなど、現在では職業語の性差の是正として社会により浸透してきている。しかし、配偶者の呼び方に関してはそのような社会的変化は反映されていない。“パートナー”や“(お)連れ合い”などジェンダー・ニュートラルな配偶者の呼称も推奨されてはきたが、従来の呼称に取って代わって広く一般に浸透しているとは言いがたい。

ジェンダー・ニュートラル表現ではなくとも、自身の配偶者であれば、“夫”“妻”という差別的な意味を含有しない呼称が存在するが、他人の配偶者についてはそれすらない。「ご主人」に変わる呼称に関しては、「旦那さん」が現在は特に若い世代に広く使われているが、これは古くはサンスクリット語の *dānapati* を語源とし「布施」「施しをする人」という意味で一見問題なさそうではある。しかし、後に奉公人が主人を呼んだり、女性が生活の面倒を見てくれるパトロンを呼んだりする際にも使用されてきた歴史を考えると主従関係を含有する語として「ご主人」と同等で考えると考えられる。また「ご夫君」を推奨する人々もいる。「国際婦人年をきっかけに行動を起こ

ず会」では、1975年の国際婦人年のメキシコ大会で「ミズで呼ぼう」¹と提案されたことを受け、「主人」を「夫、つれあい、配偶者」に、「ご主人」を「ご夫君」へ呼び改めるようにNHKに提案したという事実もあり（遠藤 1985）、「ご夫君」は確かに差別感がなくよさそうだ。しかし、対になる「ご細君」は同輩以下の妻を指す²ため、目上に対しては失礼にあたり、その使用は普遍的ではない。「ご細君」の代わりに「ご妻女」を推す人もいるが、「妻と娘」という意味もあるため、少々紛らわしい。

一方、「奥さん」に代わる呼称では、一般的には「ご細君」、「お嫁さん」なども使われてきたが、どちらもその文字が示すとおりジェンダー的には問題が否めない呼称である。また商家の女主人の尊敬語である「おかみ（御上）さん」という呼び方も存在するが、語源は近世大阪での良家の夫を亡くした妻や隠居した義母や老婆に対する尊敬語である³ことを考えると、現代社会で一般的に使用できる呼称ではない。このように、「ご主人」「奥さん」の代替語は今までも様々な代替語が考えられてきたが、いずれも少なからず使いづらい問題を含んでおり、適切な代替語がないまま今日に至っている。

70年代の日本におけるフェミニズム運動、いわゆるウーマンリブの先駆者らに始まり当時の女性たちが、従来のイデオロギーに果敢に立ち向かい、多くの差別や差別表現を是正してきたにもかかわらず、女性の社会への進出も当たり前になった今、世の中の配偶者の呼び方はなぜ、いまだ変わらないのであろうか。このような疑問から、筆者は2010年に日本語ジェンダー学会のウェブサイトにてこのトピックでエッセイ「改まった場における他人の配偶者の呼び方」を発表し、その中で“夫さん”“妻さん”という他人の配偶者の呼称を提案した。しかし、これらの呼称もまだ日の目を見ない。

1. 2 「夫さん」使用の試みと若者世代の関心

“夫さん”という呼び方について、寿岳（1988）が「ごく少数“夫さん”という呼称を採用している人もいるが、今のところ一般性は獲得していない」と述べているところを見ると、どうやらすでに80年代には一部ではこの呼称を用いる試みがなされていたようである。また、原田（2008）も「以前「夫さん」・「妻さん」という呼び方が推奨されたこともあったが、残念ながら受け入れられてはいない」と報告している。しかし、どちらもこれらの新の具体的な例や出典を示していないため、正確にはいつ頃からどのように用いられ始めたかは定かではない。

そこで、まず、他人の夫を「夫さん」と呼ぶ試みがなされた時期を推測する手掛かりとして、自身の夫を指す「夫」や「主人」という呼称が一般的に世間で用いられた時期を確認することが鍵になると考えた。

辞書⁴説明による「主人」とは、歴史的に古い順に、①家の持ち主（808年 文華秀麗集ほか）、②一寺一山の棟梁、または寺主（1235-38年 明和本正法眼蔵随聞記）、③他人を従属または隷属させている者、他人を使用している者（1254年 古今著聞集ほか）、④客をもてなす立場にいる人（1845年 茶湯一会集）、⑤妻が他人に対して自分の夫をさしている（1962年 庄野潤三『道』）、の5種類があるが、この辞書が示す過去の文献の年代を見ても、⑤「妻が夫をさしている“主人”」は、他の4種の意味と比較してそう古い時代に始まったものではないとみられる。遠藤織枝（1985）は、「主人」が「夫をさす語」として辞書に認知されたのは大正期後半であったとしている。

遠藤（1999）⁵は、妻が自身の夫を指す呼称に関して、明治30年頃から1985年頃までの90年近くの期間を10年から20年ほどの間隔で、新聞における読者投書欄や身上相談欄、家庭問答や女性相談欄などを調査し、次のようにまとめている。

- ① 新聞で夫の意の「主人」が表れるのは明治 30 年代後半であるが、大正から昭和前期までは「夫」の方が主流を占めていた。
- ② 戦後は「主人」が「夫」と同じくらい使われるようになってきて現在 (1985) では「夫」を上回る傾向がみられる。

すなわち、昭和 10 年ごろの新聞による「夫の呼称」調査では、全体として「夫」が 70% から 86% を占め、「主人」という呼び方は、まだ少数派であったが、昭和 28,9 年頃は「夫」と並んで「主人」が書き言葉でも多数使用されるようになり、それより 10 年後の昭和 39 年(1964)頃までその傾向が継続していたのである。その傾向はその後さらに拡大し、文化庁(1999)の調査報告に示されるように、20 世紀末には 74.6% が「主人」と呼ぶようになっている。

また遠藤が述べているように、1975 年に「国際婦人年をきっかけに行動を起こす会」で「主人・ご主人」の呼び方を変えるように NHK に提案した、その 20 年も前の 1955 年第一回母親大会で、丸岡秀子氏が「主人と呼ばず夫と呼びましょう」と提案しているところを見ると、この「主人」という呼称は当時、既に多くの妻たちによって使用されていたということであり、この提案に呼応して「夫」を用いると同時に、他人の配偶者について「ご夫君」や「夫さん」という呼称を用いる試みもまた始まったとしても不思議はない。以上の時代背景から、前述の寿岳も、その試みが 80 年代以前にすでにあったことについて著書の中で触れたと推察出来る。

一方、「妻さん」という呼び方に関する先行研究は、残念ながら見当たらない。アカデミックな先行研究には見当たらないが、2017 年 8 月現在“妻さん”や“夫さん”でインターネット検索をしてみると、「配偶者のニュートラルな呼び方」、「他人の配偶者を何と呼びますか?」「他人の配偶者を何と呼ぶのがスマートなのか」など、様々な投稿や記事が多数出現する。その内容は、従来通りの「ご主人」「奥さん」が正式だと断言する説得型や「そのような些細なことに執着するな」や「語源がどうであれ、以前から単なる符号として使われてきた」などという従来型意見に加え、「“夫さん” “妻さん”もありでは?」「すでに“夫さん” “妻さん”を使っている」という意見も多く見られる。従来の呼称に疑問を呈した誰かのツイートを発端とする多数の人々の意見交換もあちこちに見られ、世間一般の人々の関心の高さが伺える。それらの発言より、特に若い世代で従来の呼び方を避けたいという意見が少なからず存在するということが明らかである。社会言語学やジェンダー関連の分野などの専門分野における先行研究は見あたらないが、この一般の人々の現象は社会の生の声として伝わってくることは事実である。

2. アンケート調査

2. 1 先行研究

このテーマに関するアンケート調査は少なくない。男女の配偶者の呼称に関して調査したものは、NHK ことば調査グループ編(1980)や前述の文化庁 (1999)による世論調査をはじめ、個人研究者による独自の調査、例えば、遠藤織枝(1985)、米田正人(1987)、金丸芙美(1997)、杉原道子(2000)、寺澤陽美(2007)などが代表的ではあるが、いずれも自身の「夫」や「妻」を指す場合についてのアンケート調査である。他人の「夫」や「妻」を指す場合についてのアンケート調査は極めて少ない。呉 輝,吉見孝夫(2003)は妻が他人の夫を言及する呼び方に関してアンケート調査を実施したが、回答数はわずか 42 名と少ない。

また、アンケート調査ではないが、遠藤(1985)は、他人の夫の呼び方に関して、新聞の相談欄における女性相談者からの相談への回答者による実例 (大正 5 年(1916)から昭和 60 年(1985)まで)を 19 例紹介している。遠藤(1986)は「配偶者を呼ぶことば—夫から妻を—」において、自らのアンケート調査は実施していないが、1986 年 1 月から 9 月までの新聞 4 誌および雑誌一誌の中で投

書欄、人物紹介欄、エッセイなどで筆者が自分の妻を表現している語を拾い、書き言葉に関する調査を実施し、その統計結果を分析している。さらに、ある理髪店の主人夫妻に客との会話のなかで出てきた語を書き込んでもらい、その統計結果も報告している。どちらも貴重な調査だが、アンケート調査ではないため、本稿の先行研究との比較では、これらの調査結果は扱っていない。

男女双方の他人の配偶者、および「ご主人」「奥さん」に代わる呼称に関する調査は、朝日新聞 Dear Girls が 2017 年 3 月までにインターネット上でアンケートを実施し、1500 以上の回答を得ているが、それ以外には、統計として信頼性のある回答数を得たものは現在まで見当たらない。朝日新聞の調査は 2017 年 3 月にいったん回答募集を打ち切ったが、その後、正式な調査結果は同社によって未発表であるため、正確なデータを本稿で引用することは差し控える。

2. 2 独自のアンケート調査

2. 2. 1 調査目的と意義

現在まで、他人の配偶者の呼称に関するアンケート調査は、前述したように、サンプル数が少ない呉・吉見(2003)のみであり、本稿の研究テーマである他人の配偶者の従来型の呼び方に代わる新呼称に関するアンケート調査は現時点では皆無に等しい。そのため、ごく一般の人々（特にジェンダーや社会言語学や日本語教育の専門家ではない人々）がどのような呼称を実際に用い、考え得る新呼称に関してどのように受け取っているかという意識調査を実施し、その調査結果を分析する意義は大いにありと考える。

2. 2. 2 調査内容：回答者情報

できる限り幅広い分野の幅広い年代の人々から回答を得るために、インターネット上の「Google フォーム」をツールとし、本研究テーマに関心の高い学会関係や仕事柄ジェンダーに対して比較的知识があるだろう大学関係は調査対象に含めないように、自身の趣味でやっている Facebook を通じてこのアンケート調査回答者を募った。筆者の Facebook のいわゆる“友人”は、仕事関係が少なく、様々な職業や年代の人々が含まれるため、回答者の職業に偏りは出ないと考えたからである。Facebook の友人らにアンケートの URL をシェアしてもらい、“友人の友人”そのまた友人というように拡散してもらった結果、2015 年 10 月から 2016 年の 2 月までの約半年間で 186 の有効回答を得た。調査期間を半年かけたのは、最初の段階では回答者が女性に偏り、また 30 代と 60 代以上の回答が少なかったため、数回 Facebook を通じて回答者を男性や 30 代に限って再募集したためである。それでも、次の図 1、2 が示すように男性回答者は期待通りには集まらず全体の 44.6%にとどまり、回答者の 55.4%が女性であった。また、回答者の年代は、30 代(18.8%)と 60 代

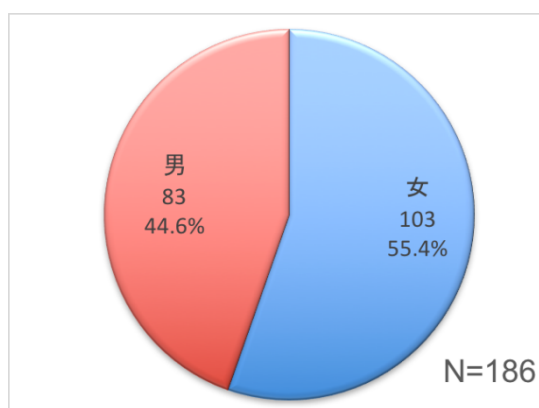


図1 アンケート回答者の性別

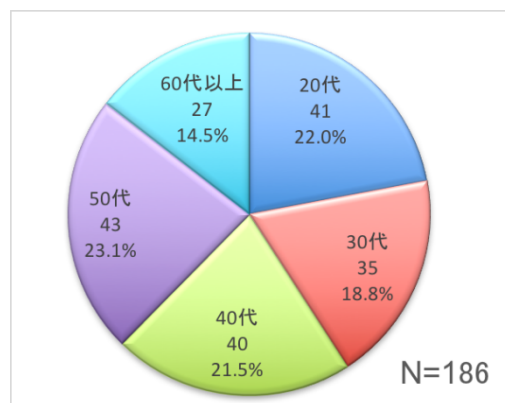


図2 アンケート回答者の年代

以上(14.5%)は他の年代より少なかったが、他の年代は 20 代(22.0%)、40 代(21.5%)、50 代(23.1%)とほぼ同数かそれに近い数が収集できた。

回答者の職業は会社員（会社役員を含む）25.8%、教育者 17.7%、パート・アルバイト 11.8%、専業主婦/主夫/無職 12%、専門職・技術職 10.8%、学生 9.7%、自営業 6.5%、公務員 5.4%となっており（図 3）、何かの分野や職業に特化することなく広範囲にわたっている。

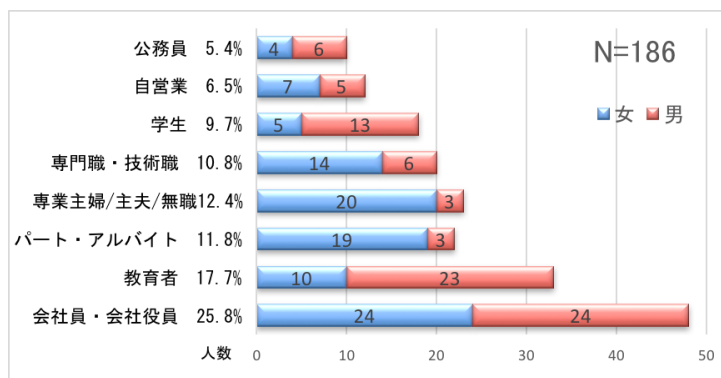


図 3 アンケート回答者の職業

るが、それから本調査時までには 13,4 年経過しており、その間に一般のジェンダー意識も相当変化している可能性が高い。したがって、本調査においても、他人の配偶者のみならず自身の配偶者の呼び方に関しても調査することは意義があると考え、どちらも調査することとした。

また、先行研究は、話す相手によって会話のフォーマリティ(formality)が変わることを前提に複数場面に関して調査しており、そのために質問項目が多岐にわたっている、それに対し、本調査は言語教育、言語学、ジェンダー学などの専門家ではなく、ごく一般の職業の人々を対象としてネットアンケートを媒体としているため、質問を出来るだけシンプルにし回答しやすくすることを第一目標とし、会話相手を「親しくない人に対して」、すなわち、「ウチとソト」の「ソト」に向けた呼び方と限定した。回答者が「親しくない相手」を、「上司」や「知らない人」、あるいは、「親しくない同輩・年下」などに分類し各々の場面や相手によって呼び方を変えている場合は、「その他」を選択しそこに複数の回答を記入したり、全体のコメント欄に自由記入することで対処した。結果的に、複数回答を記入した人は 4 名のみであり、コメント欄にこの点に関して意見を述べた人は全体で 2 名だけであった。理想的には、会話の相手、場面の複数設定をした上で回答してもらったほうが、より綿密な回答が得られることは明らかだが、今回は、このテーマ（他人の配偶者の呼称と新呼称）に関する最初の一步の調査として適切だと考えた。

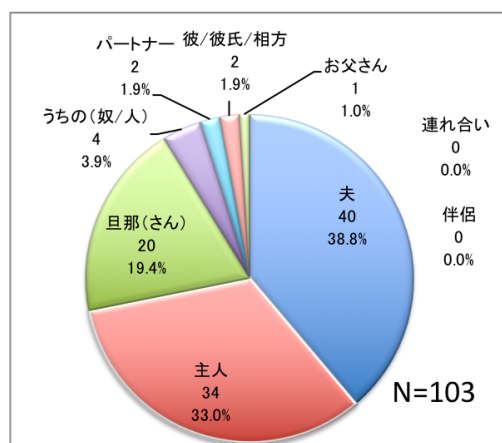


図 4 自分の配偶者の呼び方（女性回答）

2. 3. 現状に関する調査内容と結果

2. 3. 1 自身の配偶者を指す場合

まず、女性が「親しくない人（すなわち「ソト」の人）に向かって自分の配偶者のことを言及する場合」だが、次の図 4 に示すように、最も多かったのが「夫」の 38.8%、次に「主人」で 33.0%、その次に多かったのが 19.4%の「旦那(さん)」であった。この結果は、先行研究の結果とは大きく異なる。

次に本研究結果と比較するために、5 種類の代表的な先行研究のデータと本研究のデータ図を参照しなが

ら比較分析する。まず図 5a に示したように、NHK ことば調査グループ編 (1980)の世論調査では、あまり親しくない人と話す場合、「主人」が 63%で最も多く、「夫」はわずか 1%で、「旦那」は回答結果にはなかった。それより 5 年後の遠藤の調査 (1985 年) では、「主人」が 79.6%と急増し⁶ 「夫」は 3 番目でわずか 3.4%のみ、「旦那」は皆無であった。その 13 年後に文化庁(1999)が 1998 年に実施した世論調査は他の調査と異なり複数回答であるため、別途、図 5b に示すが、最も多かったのはそれ以前の NHK の調査と同じ「主人」(74.6%: multiple answer 以後 MA) である。実に四人に三人が「主人」を使っている。次に多かったのが、「(お) 父さん」(43.7%:MA) であるが、他の調査ではわずかしかなかったため図 5a には含めていない。次は、NHK 調査でも遠藤調査でも皆無であった「旦那(さん)」(22.2%:MA) であるが、ここでは全回答者のほぼ五人に一人が用いるという特徴がある。最も少ないものは、NHK でも遠藤でも僅か数パーセントだった「夫」(14.3%:MA)であった。

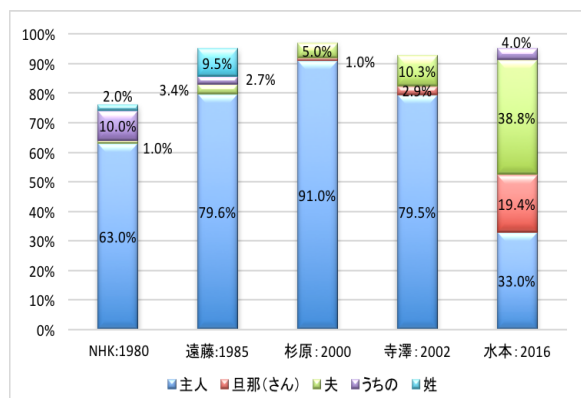


図 5a 自分の配偶者の呼び方
先行研究との比較 (女性回答)

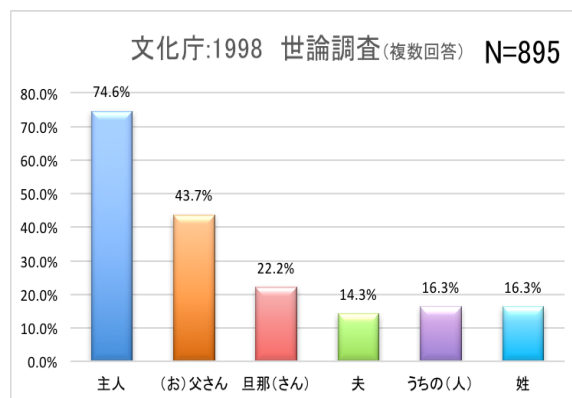


図 5b 自分の配偶者の呼び方
文化庁の調査結果 (女性回答)

ところが、2 年後の杉原(2000)⁷ の調査では、「主人」が 91%と大幅に増加し、それに反して「夫」が 5%、「旦那」が 1%と再び 15 年前の遠藤調査と同等数に減少している。寺澤(2007)の調査⁸ は 2002 年に実施されており、杉原調査より 2 年後であるが、この調査では、最も多く用いられている「主人」は、遠藤(1985) の調査結果とほぼ同率の 79.5%へと減少した。それでも 8 割近くが「主人」を使うのである。また、この調査では、それ以前は微量だった「夫」が少量だが増加して 10.3%となっている。

以上、先行研究のアンケート調査を概観したが、1980 年の NHK の調査から 22 年後の 2002 年に寺澤が実施した調査までは、「主人」が圧倒的に多いということにおいては、さほど変化はない。

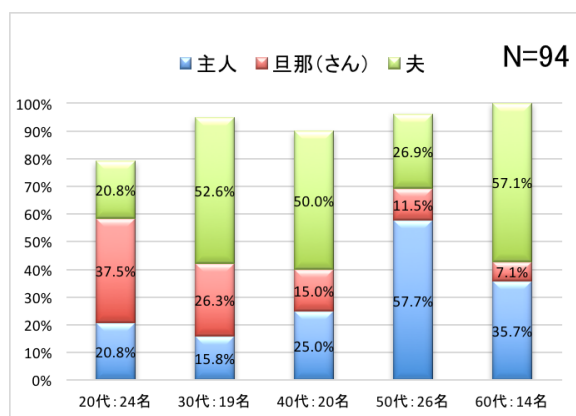


図 6 自分の配偶者の呼び方上位 3 位
年代別 (女性回答)

しかし、寺澤の調査から 13,4 年後の本調査結果は、21 世紀に入り女性達の意識が変化していることを反映してか、それまでの「主人」オンリーの傾向は半数以下に激減している。「主人」の代わりに「夫」が優勢呼称として急増し、今後は「主人」から「夫」へとシフトしていく可能性をうかがわせている。

また、2000 年以来 15 年以上ほとんど消滅していた「旦那(さん)」が本調査では全体の約 5 分の 1 の 19.4%に増加しているが、上位 3 種の「主人」「旦那さん」「夫」を年代別に比較した図 6 に見る

ように、「旦那(さん)」は20代が37.5%とそれ以上の年代より多く使用しており、反対に30代、40代で52.6%、50.0%と多い「夫」が、20代では約半分の20.8%に減少している。この傾向が今後も増大していくのかは、さらにサンプル量を増やし注視していく必要があるだろう。また、ジェンダー・ニュートラルな呼称「パートナー」はわずか2名、「連れ合い」「伴侶」は一人もいなかったことから、これらの呼称が現在の社会でもごく少数しか用いられていないということが明らかである。

次に男性が自分の配偶者のことを言う場合だが、「妻」が39.8%で最も多く、その次に「家内」の20.5%と「嫁さん」の14.5%が続く(図7a)。図7bは上位3位の呼称を年代別に比較したものである。各年代のサンプル数に若干ばらつきがあるため厳密には言えないが、中高年以上で多く

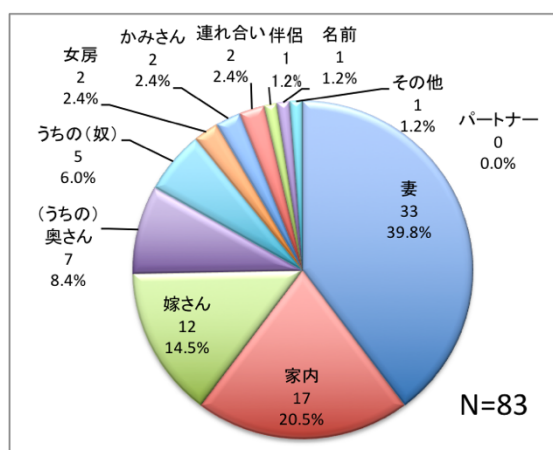


図7a 自分の配偶者の呼び方
(男性回答)

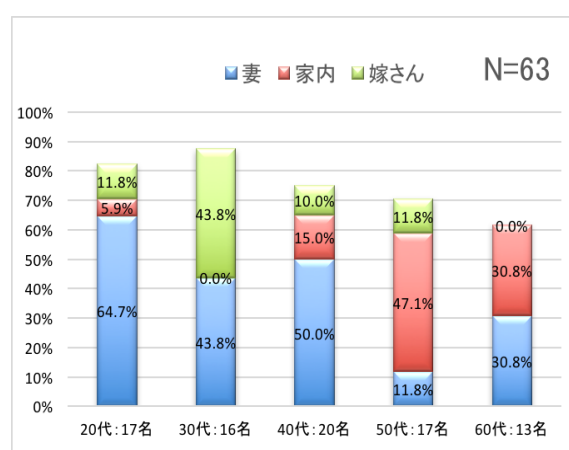


図7b 自分の配偶者の呼び方上位3位
年代別 (男性回答)

用いられている「家内」が若者世代からは消えつつあり、20代では64.7%が「妻」を用いているところから、今後はさらにこの兆候が進んでいくことが推測できる。さらに、「嫁さん」は30代に好んで用いられているが、その上の年代と下の年代ではごく少数しか使用されていない。ジェンダー・ニュートラルな「連れ合い」「伴侶」はそれぞれ2名と1名いたが、「パートナー」に関しては皆無であった。男女共に、これらの呼称は一般的には使用されていないのは明らかである。

次の図8aおよび8bは、先行研究の調査(NHK 1980、米田 1987、文化庁 1998、杉原 2000、寺澤 2007)と本調査(2016)の結果を比較したものである。文化庁(1989調査)のデータは複数回答であるため、他の調査とは別に図8bに示す。これらの比較図からも明白なように、1980年のNHKによる調査から2000年の杉原による調査までは、1998年実施の文化庁の世論調査と同じく男性

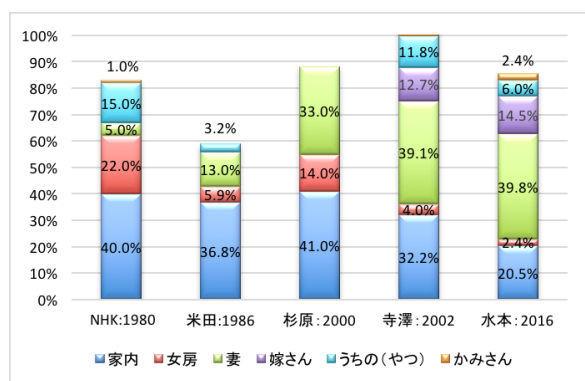


図8a 自分の配偶者の呼び方
先行研究との比較 (男性回答)

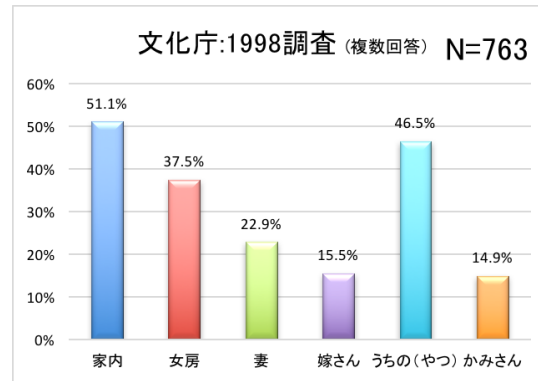


図8b 自分の配偶者の呼び方
文化庁の調査結果 (男性回答)

が自分の配偶者を指す表現として最も多いのは「家内」であったが、それまで優勢であった「家内」は2002年の調査から減少し始め、2016年の本調査では2000年（杉原）の半数以下に減少している。

また、80年代から90年代までは劣勢であった「妻」の使用率は2000年に実施された杉原の調査から30%以上に急増し始め、その傾向がその後も継続し、2002年の寺澤の調査以後は最も多く用いられる呼称となり今日に至っている。「家内」と「妻」の使用率は反比例しており、2016年の本調査では「妻」が「家内」の2倍近く用いられている。「女房」を用いる男性も1980年頃には五分の一ほどいたが、今世紀初め頃から減少し続け、本調査では60代の男性が2名使用しているのみであった。

以上の調査結果より、現在では、ジェンダー・ニュートラルな呼称は、いまだマイノリティの域を脱せずにいるが、主従関係や差別的意味合いを含む呼称の代表格である「主人」や「家内」は以前より相当減少してきていることが分かった。特に、20代、30代の若者世代による認識が上の世代とは異なり、「主人」から「夫」へ、「家内」から「妻」へと移行して来つつあることが確認できた。

2. 3. 2 他人の配偶者を指す場合

前項では、自身の配偶者を言及する場合についての調査結果を報告したが、ここでは、他人の配偶者を言及する場合について述べる。本稿1. 1で述べたが、自らの配偶者の呼称は差別的な意味を含む「主人」の代わりに、そのような意味を含まない「夫」で代用出来、また、「家内」の代わりに「妻」という代替語もあるため、今世紀に入ってから徐々に若い世代の間で差別的意味を含有しない呼称へとシフトしてきつつあることが確認できた。

しかし、他人の配偶者の呼称に関しては、前述のように適切な代替語がいまだなく、ジェンダー・ニュートラルの見地から推奨されている「パートナー」や「お連れ合い」や「ご伴侶」などは、自身の配偶者の呼称の場合と同様に、いまだに広く認知されていない。

次の図9aは他人の男性配偶者を指す場合の女性の回答、図9bは男性の回答である。女性の半数以上(58.3%)が「ご主人(さま)」を用いるのに対し、男性の半数以上が「旦那さん(さま)」(51.8%)を用いている。しかし、どちらも「ご主人(さま)」と「旦那さん(さま)」の2種の合計がそれぞれ97.1%、97.6%と100%近くに迫っている。

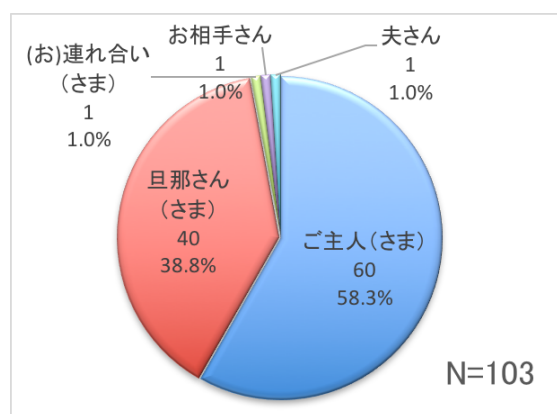


図 9a 他人の夫の呼び方
(女性回答)

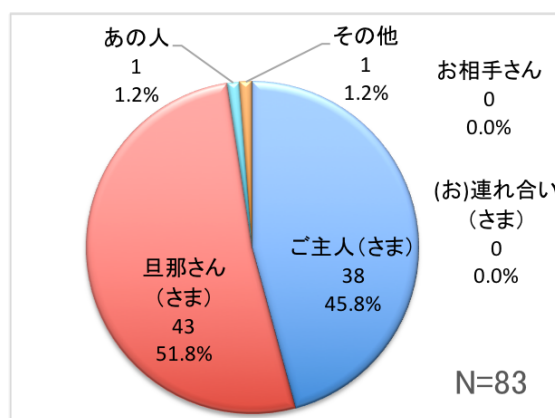


図 9b 他人の夫の呼び方
(男性回答)

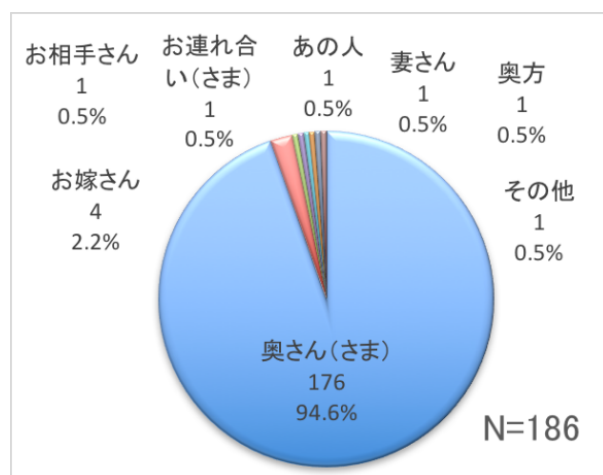


図 10 他人の妻の呼び方
(男女合計回答)

その他の言い方としては、女性の回答は「(お) 連れ合い (さま)」、「お相手さん」、「夫さん」がそれぞれ 1 名のみ、男性に関しては「(お) 連れ合い (さま)」、「お相手さん」ともにゼロであり、その他 1 名は質問内容を正しく理解していないであろう回答であった。また他人の女性配偶者を指す場合は、男女がほぼ同じ回答であり、男女合計の割合の平均値を図 10 に示したが、「奥さん (さま)」が 94.6%を占めている。男女合計の回答であるため、その他の呼称の種類が 6 種類と多く「お嫁さん」の 4 名以外は、「お連れ合い (さま)」「お相手さん」「あの人」「妻さん」などすべて 1 名のみ回答であった。今回の調査結果からは他人の配偶者については男女ともに

「パートナー」という呼称は 1 例もなかった。

以上の調査より男女ともに他人の男性配偶者に関しては、「ご主人 (さま)」と「旦那さん (さま)」が、女性配偶者に関しては「奥さん (さま)」が、10 人中 9 人以上に用いられていることが明らかである。前節において、自身の配偶者を言及する場合は、ジェンダーにおいて差別的な意味合いの濃い呼称からニュートラルなものへとシフトしている現象が認められたが、他人の配偶者に関しては、代替語がないことと、ジェンダー・ニュートラルな呼称がまだ社会一般的に認知されておらず、その意義が広範に承認されていないため、主に従来の呼称がいまだに使用されているという現状が確認出来た。

2. 3. 3 配偶者の呼び方：調査結果まとめ

以上の結果から、現在の社会において一般的に用いられている呼称は次のようにまとめられる。

<A. 自身の配偶者の呼称>

- (1) 女性は三分の一ほどが「主人」を、それより少々多くが「夫」を用いており、若い世代ほど「旦那 (さん)」を多く使用する傾向が認められる。
- (2) 男性は三分の一あまりが「妻」を用い、五分の一が使用する「家内」は 50 代以上に限られる。「嫁さん」は 30 代、40 代が使用しているが、上の世代、下の世代ともに使用はごく少数である。

<B. 他人の配偶者の呼称>

- (1) 男性配偶者に関して、女性の半数以上が「ご主人」を用い、約三分の一が用いる「旦那さん (さま)」は若い年代に好まれている。男性の半数以上が「旦那さん (さま)」を、半数近くが「ご主人 (さま)」を用いている。
- (2) 女性配偶者に関しては、男女いずれも「奥さん (さま)」が 9 割以上である。

<C. ジェンダー・ニュートラルな呼称>

A. も B. も「パートナー」「(お) 連れ合い」「(ご) 伴侶」「お相手 (さん)」「相方」「うちの (奴/人)」などは、それぞれ 1 名から多くても 5 名であり、ごく少数しか用いられていない。

3. 配偶者のジェンダー・ニュートラルな呼称と新呼称：調査結果と考察

上述の調査結果により、現在の配偶者の呼称に関する実態は把握出来たが、では、ジェンダー・ニュートラルな呼称がなぜ一般に普及しなかったのだろうか。また、本稿 1. 2 で述べた「夫

さん」「妻さん」は今後、有力な代替語として社会に承認される可能性はあるのだろうか。それを知るために、今回のアンケートでもこれらの“新”呼称について人々がどのような印象を持っているか調査してみた。

3. 1 パートナー

質問は、自分の感じ方や受け取り方により集中して欲しかったため、会話において話者（会話の相手）が自分（会話の聞き手）の配偶者のことをそれらの呼称で言ったらどう感じるか、というものにした。「パートナー」「お連れ合い（さま）」「夫さん・妻さん」の3種に関して聞いてみた。

次の図 11a と 11b は「パートナー」に対する結果であるが、男女で若干受け取り方が異なる。どちらも、言われても「別に構わない」という意見が最も多かったが、女性が 67%であるのに対し男性は 47%であり、男女で受け入れ感に差がある。2 番目に多いのが、どちらも「そのような言い方に違和感をおぼえる」であり、女性 17.5%、男性 24.1%、3 番目に多いのが、どちらも「一瞬、え？誰のこと？とを考えてしまう」で、女性が 14.6%、男性が 26.5%である。

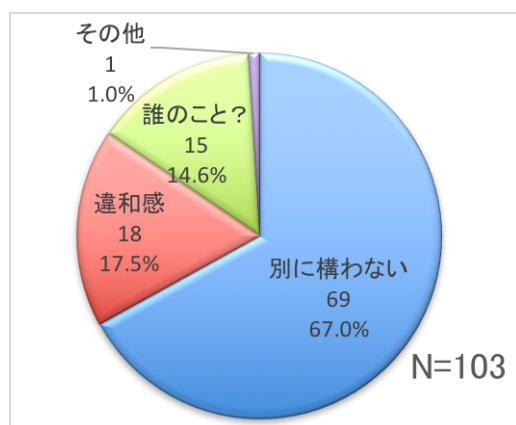


図 11a 自身の配偶者をパートナーと呼ばれたら（女性回答）

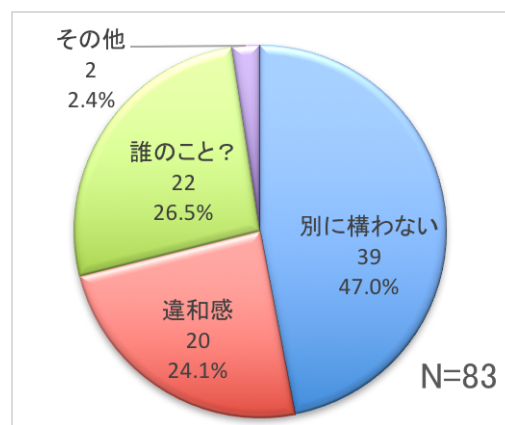


図 11b 自身の配偶者をパートナーと呼ばれたら（男性回答）

社会で仕事をしていくにあたり、仕事上の「パートナー」の種類は少なくない。例えば、「ビジネスパートナー」「パートナー企業」「経営パートナー」「行政パートナー」「オリンピックオフィシャルパートナー」等、仕事や社会活動上のパートナーに加え、ごく身近な生活上でも「テニスのパートナー」「ダンスのパートナー」「英会話のパートナー」等、様々である。それ故、文脈が明確でなければ、自分の配偶者のことを指しているとは気づかず、一瞬でも考えてしまったり、意味が理解できたとしても違和感をおぼえるのは男性の方が多いようである。反面、女性のほうが「別に構わない」という回答が男性より 2 割多いが、これは、文脈が明確であり自らの配偶者を指していることを正しく理解していることを前提とすれば、女性は夫と「同等」という意味合いを感じて、この呼称を男性より受け入れ易いのかかもしれない。

3. 2 お連れ合い（さま）

次に「お連れ合い（さま）」に関する調査結果を図 12a と 12b に示す。この表現に関しては、「別に構わない」という回答が男女ともに最も多かったが、男女ともに 2 番目に多い「違和感を感じる」のは女性の方が多く、その割合は女性が「別に構わない」と思うのと同率の 37.9%である。女性は「パートナー」に対してよりもこの表現の方が違和感を感じる人が相当多いよう

である。コメント欄に数名の20代、30代の女性が書いてあったが、「連れ合い」というのは、女性にとっては、それが配偶者を指すのであれば“長く連れ添ってきた相手で高齢者”という印象が強く、特に若い世代には承認しづらいようである。男性は、「別に構わない」も「違和感」も「パートナー」に対する回答とほぼ同じである。この呼称も、男女ともに「一瞬、誰のこと？」と理解に苦しむのは、男性は「パートナー」と同じく26.5%、女性は「パートナー」より6ポイントほど増え20.4%であった。

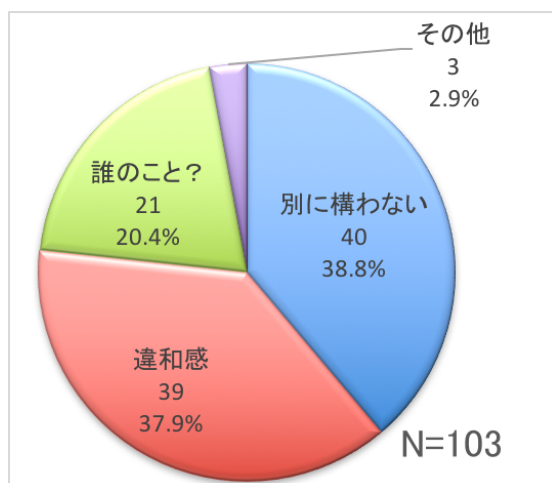


図 12a 自身の配偶者を「お連れ合い」と呼ばれたら（女性回答）

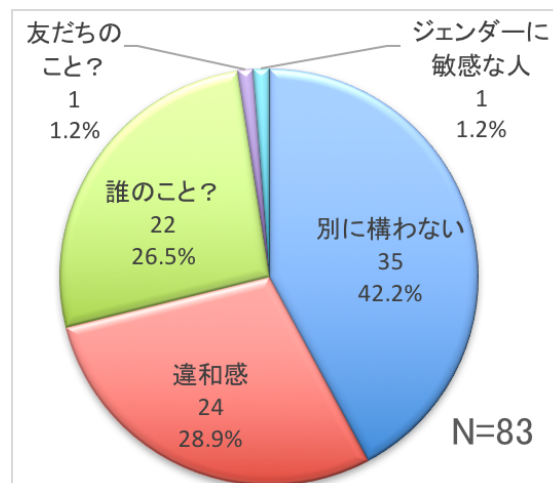


図 12b 自身の配偶者を「お連れ合い」と呼ばれたら（男性回答）

この呼称が違和感を人々により多く与えるのは、これが古くから「旅は道連れ」のことわざ⁹でも知られていることと、コメントにもあったように「人生の道連れ」という意味で広く使用されてきたことにも影響されているのではないかと考えらえる。いずれも哲学的・文学的な響きもするが、前者は旅という一時的な行動の道連れの印象が強く辞書でも第一義として挙げてある。後者は確かに人生を共に歩む結婚相手としての意味として辞書では二番目に挙げてあるが、「その他」の回答として挙げた人もいるように、最近では友だちのことを「ツレ」という人も増えてきたため、すんなりと「配偶者」という意味として受け取れない要素があつてのことかもしれない。男女ともに、「別に構わない」と感じる人より、「違和感」や「誰のこと？」と否定的な印象を受ける人のほうが多く、6割ほどが承認できないようである。

3. 3 新呼称：「夫さん」「妻さん」

「夫さん」、およびそれと対をなす「妻さん」ということばは辞書にも承認されていないが、それらの“新呼称”についても聞いてみた。この呼称は「夫」や「妻」に単に敬称の「さん」をつけただけであるため、誰のことを指しているのか意味は通じる。したがって、「パートナー」や「お連れ合い（さま）」のように「誰のこと？」という選択肢は設けず、その代わり、「なぜそのような言い方をするのか不思議」という選択肢を設けた。これは、筆者自身がこれまでに「夫さん」「妻さん」を実際に使用して、話相手からよく受けたコメントによっている。

これに関しては男女で若干異なる結果が出た。次の図 13a と 13b に示したように、まず女性の回答では、この呼称に「違和感を覚える」人(37.9%)が最も多く、新呼称であるゆえに「なぜそのような言い方をするのか不思議」と感じる人(29.1%)と合わせると全体の7割近くがこの呼称を受け入れ難いように見られる。一方、男性では、「違和感」と「別に構わない」と感じる人が

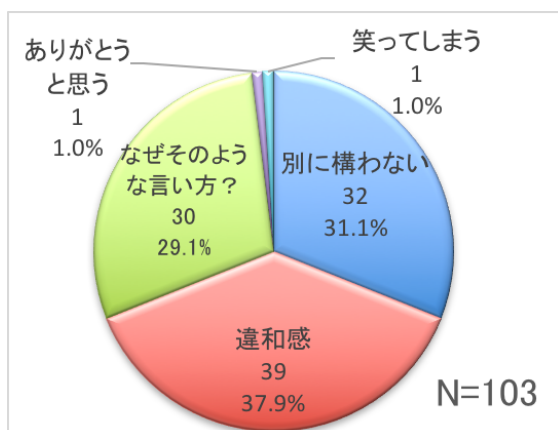


図 13a 自身の配偶者を「夫さん」と呼ばれたら（女性回答）

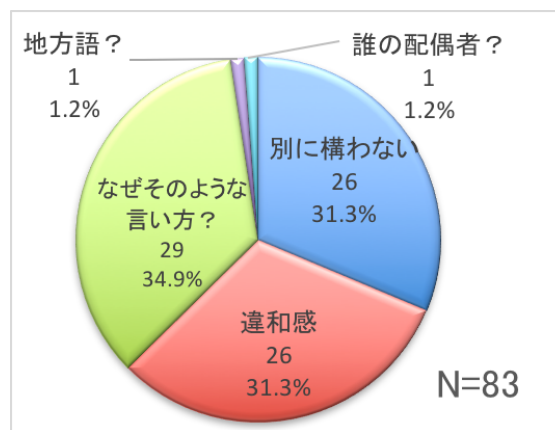


図 13b 自身の配偶者を「妻さん」と呼ばれたら（男性回答）

同率で 31.3%、男性は女性より「違和感」を感じる人は少ないが、「不思議」34.9%と合わせると、やはり 7 割近くの人がこの新たな呼称を受け入れ難いようだ。

しかし、選択肢の「なぜそのような言い方をするのか不思議」という回答は男女平均で 3 割弱程であったが、コメント欄に次のような肯定的な意見が見られた。

- この語を使われて不愉快に感じるということではなく、聞き慣れない表現に対しての違和感
- 最初このことばを見てはじめてなので変だと思い“違和感”を選んだが、よく考えてみると慣れればこれでいいかなとも思う
- ジェンダーに敏感になれば、こういう表現もありだが、現状では使うのは勇気がいる
- 普段あまり感じたことはなかったが、あらためて質問されるとそのような呼び方もありだと思った
- このような言い方は今まで聞いたことがなかったので、なぜ? という感が強い。奥さんやご主人は使いたくないが、他の呼び方が思いつかない。別の呼び方（固定概念のない）が定着することを希望する。
- こんな表現があるんですか。おもしろい!
- “夫さん、妻さん”新鮮でいい。今後使ってみたい!

以上のコメントは、慣れないことばが「不思議」ゆえ、それを使用する理由や意義を理解すれば受け入れることが出来るという可能性を感じさせるものであった。「パートナー」や「お連れ合い」の「何のことを言っているのか一瞬分からなくなり考えてしまう」という反応は、その語の意味理解に決定的な問題が生じるために違和感も感じるのだろうが、それに比較して、この新呼称に対する「不思議」という印象は、何らかのきっかけさえあれば、「違和感」を取り除き、「別に構わない」に変わる可能性を秘めているとも考えられる。

実際に、筆者が 2010 年あたりよりこれらの新呼称を周りの人々に対して使用してみると、まず最初に「あれ?」という顔をされるが、誰を指しているかについての理解には支障はなかった。親しい人のなかでなぜそのような表現を使うのかという質問がよく出たが、こちらの真意を伝えると、それ以後はその表現に慣れたのか特に怪訝な顔をすることもなくなり、しばらくすると、“夫さん、妻さん”を使うようになった人々も出てきた。新語は最初は違和感を感じるが、意味理

解に支障をきたさない場合は会話が滞ることがなく、その語を用いる意義が理解できれば、徐々に周りにその波は広がってゆくと実感した。

4. まとめと今後の展望

以上、(1)「あまり親しくない人に対して自身の配偶者のことを言及する呼称」および、(2)「他人から自身の配偶者について言及される場合の呼称」について、アンケート調査結果を報告した。先行研究のように、話す相手や場面（フォーマリティの異なる場面）を限定した質問をせず、敢えて「親しくない人に対して」と設定したことにより、(1)の設定の意味を誤解した回答が若干見られたこと、年代別回答者数が均等ではなかったため正確な年代別比較が難しかったことなど、今後の検討課題は認められる。しかし、本調査により、10年ほど以前から人々の意識の変化があり、従来の主従関係の差別的な意味合いを含む呼称「主人・家内」は大きく減少し、それに代わってそのような意味合いを含まない呼称「夫・妻」が増加していることが確認出来た。1955年に第一回母親大会で丸岡氏が「主人と呼ばず夫と呼びましょう」と提案して以来、実に60年ぶりに漸く女性たちの日常に「夫」が帰還を果たしつつある、ということを確認することができた。

しかし、(2)に関しては、ジェンダー・ニュートラルな「パートナー」「お連れ合い（さま）」などが現在でも一般には意義を認知されておらず、従来通り「ご主人」「旦那（さん・さま）」や「奥さん（さま）」などが9割以上用いられているという状況はいまだに変わらない。これは、その適切な代替語がないという現実起因しているのであるが、代替語として提案された従来のジェンダー・ニュートラルな呼称は、文脈次第ではそれが配偶者を指しているとは認識されにくいということも確認出来た。それに代わる一案としての「夫さん」「妻さん」は、今までそのような言い方が存在しなかったため、「なぜそのような言い方をするのか不思議」という感強いが、一方、少なくとも意味理解の上では問題はないため、現実として男女ともに約三分の一は「別に構わない」と認知している。現時点では、新呼称に対しては「不思議感」「違和感」も強いが、コメント欄に上述のようにポジティブな意見も複数見られ、今後、なんらかのきっかけでこの表現に多く接するようになれば、想像以上に「夫さん」「妻さん」の受け入れも加速されるのではないかと期待される。

その傾向として、2017年上半期にTBSで放映されたTVドラマ『カルテット』においては、主人公の一人の第一バイオリン奏者の女性の行方不明の夫のことをカルテットの仲間が「夫さん」と呼んでいたことに対する反響がある。これが放映されるやいなや、インターネット上の発言に「夫さんもありなんだ」「夫さん、妻さん、私も使ってみようかな」というコメントが多数掲載され、一般の人々には非常に新鮮に映ったようである。

「夫さん」という表現は、アカデミックな研究では先行研究がないが、実社会では特にインターネット上ではよく見られる。例えば、最近癌の闘病生活を卒業し天国に旅立った小林麻央氏のブログにも2016年9月に「妻の夫さんへ」というタイトルでコメントが発信されている。2015年11月に社会福祉士、柳田明子氏が自身のブログに書いた「夫さん妻さんキャンペーン」によると、「近頃、福祉・医療分野において、記録や会議の場で“夫さん”“妻さん”あるいは“夫氏”“妻氏”という表現を見聞きする」と報告されている。どの程度使用されているのかデータはまだないし学術的な記録ではないが、少なくとも、インターネット上では、人々が気軽にこの表現について発言し、また社会生活でも実際に使用しているという事例は少なくない。

また、インターネット上では、かなり以前より、いわゆる「教えて」系の質問として、夫婦の呼称に関する質問や提案が多数なされており、一般の人々による様々な議論が展開されている¹⁰。ツイッターでも「配偶者のニュートラルな呼び名」¹¹ などというトピックで同様な議論が多数

見られる。ネット社会では、多くの場合は無記名という気軽さから、ありのままの声が聞かれ白熱した議論から、世間の関心の高さが垣間見える。

今後の課題としては、本研究のアンケート調査の弱点も踏まえ、「夫さん」「妻さん」など新呼称に的を絞ったアンケート調査も試みる必要があるであろう。「他人の配偶者の呼称」に関する研究はまだ始まったばかりではあるが、ネット社会であるからこそ、『カルテット』のようなメディア発信がこの新呼称の普及を後押ししてくれる可能性は高く、近い将来には、ジェンダー・ニュートラルな表現の「パートナー」は結婚という法律的な立場に固執しない人々の間でさらに用いられるようになり、「夫さん」「妻さん」も社会の声として徐々に普及してくることを期待するところである。

と同時に、自分自身も今後はさらにこの表現を積極的に使用するよう心がけることによって、より幅広く新呼称を広めてゆく必要があると痛感する。問題は、「〇〇さんの夫さん」と会話の相手以外の第三者の他称として用いた場合や自身の配偶者を「夫」と呼ぶ話相手に対して「(あなたの) 夫さん(さま)」と言うのは受け入れられ易いと思うが、自身で「主人」と呼ぶ人に対して敢えて「夫さん(さま)」と投げかけるのは、特に相手が目上の場合は勇気がいることでもある。つい最近も、ある60代女性による「夫という語は謙譲語だから、それを他人様の配偶者に対して使うのは失礼だ」という意見を聞いたが、「夫ということばは謙譲語」という考えは、「主人」が夫を敬う意味での敬語であるという観念が浸透している故の誤解であろう。同様な考え方はネット上でも数人、解説的に断言しているのを見かける。このような人びとに対して、敢えて「(あなたの) 夫さん」と、こちらの主張を通し難い面があることは否めない。しかし、言葉を変えていくためには、その壁をも乗り越えることが必要であることは言うまでもない。その壁をどのように乗り越えていくかが最大の課題でもある。1955年第一回母親大会で「主人と呼ばず夫と呼びましょう」と提案した丸岡秀子氏は「夫サン」を用いていたという。「お宅のご主人はと言う方がはるかに気楽だが、抵抗があるからこそつとめて使わなくては。これが進歩につながる」という丸岡氏のことば¹²を改めて銘肝したい。

(みずもと てるみ・北九州市立大学名誉教授)

[注]

1. 「ミズで呼ぼう」の「ミズ」は、英語の敬称の Ms. のこと。従来、男性は Mr.、女性は既婚者が Mrs. で未婚者は Miss というように女性だけ既婚か未婚かが区別されていた。これに対して Ms. は既婚・未婚を問われない女性の敬称。Ms. という敬称は古くから存在していたが、1970年代にアメリカのフェミニストによってその使用を再提案され、雑誌の名称にもなり、広く知られた結果、合衆国政府印刷局にも承認された。因みに筆者が90年代初頭にアメリカの大学で教え始めた時、事務の秘書から「敬称は何にしますか？ Mrs., Miss or “Ms.”？」と確認された。
2. 大辞林 第三版(2006), p.975 による。
3. (精選版) 日本国語大辞典 第1巻 (2006), p.518 による。
4. (精選版) 日本国語大辞典 第1巻 (2006), p.755 による。
5. 遠藤織枝(1999)の「配偶者を呼ぶことば」は、同著者(1985)による「配偶者を呼ぶことば 主人をめぐる」(『ことば』6号 現代日本語研究会)および『ことば』に見る女性'87年制作パネルよりの抜粋。

6. 遠藤は、会話のフォーマリティによって3場面を設定したが、「やや改まった場面」と「改まった場面」が本調査の設定「親しくない人に話す場面」のフォーマリティと合致するとし、その2つの場面で「主人」を使用する平均値をとった。
7. 杉原(2000)の年代分けは、年下、同年代、年上の3種だが、年下と同年代の場合、それが友人などの知っている人かあまり知らない人かは区別していないため、本調査の「親しくない人」という設定に合致するとは言えない。したがって、本調査と比較の対象となる分類は、ある程度、距離をもって話す「年上の人」だけとした。
8. 寺澤(2007)は、話し相手を *parents, in-laws, close friend, friend, boss, neighbor, stranger* と細かく分類して調査したが、本調査の条件と合致する *boss* と *stranger* の平均値をとった。
9. 江戸時代の「江戸いろはかるた」の一つに「旅は道連れ世は情け」とある。三省堂『新明解故事ことわざ辞典 第二版』(2016), p.406 より。
10. インターネット検索をしてみると、古くは2001年頃よりこのようなディスカッションがネット上で始まり、特に2010年10月から半年間レスポンスが続いた *Yomiuri Online* の「発言小町」へのある40代の子持ち女性からのトピ「主人、ご主人、の代わりに何と言う？」に対する人々の反応は130近く寄せられ白熱した。ツイッターのような短いつぶやき調ではなく、一人ひとりの発言が長く、真剣に議論している。また、この「発言小町」には2015年9月に「自分の夫は“夫”。では相手の夫はなんと呼ぶ？」というトピックを立てた女性があり、これにも同様に真剣なレスポンスが寄せられている。
11. 例えば、「はてな匿名ダイアリー」「配偶者のニュートラルな呼び名」(2017年2月10日配信 <http://b.hatena.ne.jp/entry/321405444/comment/maninthemiddle>) に対してある人が「これ思った。最近夫さん、妻さんと使い始めてる」とコメントしている。
12. 遠藤(1985)によると、1972年5月26日付の朝日新聞に「むずかしい『主人』追放」という特集がなされ、その中でこの事実が取り上げられたとのことである。

[参考文献]

- NHK ことば調査グループ編(1980)『日本人と話しことば』日本放送出版協会
- 遠藤織枝(1985)「配偶者を呼ぶことば―主人をめぐる」『ことば』6号 現代日本語研究会 pp.20-49
- 遠藤織枝(1986)「配偶者を呼ぶことば(2)―夫から妻へ」『ことば』7号 現代日本語研究会 pp.1-21
- 遠藤織枝(1999)「配偶者を呼ぶことば」井出祥子監修(財)東京女性財団編著『ことばに見る女性』クレヨンハウス pp.186-193
- 金丸芙美(1997)「人称代名詞・呼称」井出祥子編『日本語学叢書 女性語の世界』明治書院 pp.15-32
- 小林麻央(2016)「妻の夫さんへ」2016年9月22日付『Kokoro 小林麻央のオフィシャルブログ』<https://ameblo.jp/maokobayashi0721/entry-12202636646.html> (2017年7月10日閲覧)
- 呉輝、吉見孝夫(2003)「日本における妻から夫への呼び方：札幌市でのアンケート調査を通して」『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』54(1) pp.9-24
- 三省堂編修所編(2016)『新明解故事ことわざ辞典 第二版』三省堂
- 小学館国語辞典編集部編(2006)『日本国語辞典(精選版)』小学館
- 寿岳章子(1988)「配偶者の呼称」歴史科学協議会編『歴史評論 言葉から歴史を考える<特集>』 pp.29-33

- 杉原道子 (2000) 「配偶者の呼称に関する実態調査の結果と考察—日本語教材における配偶者表現について」 中国四国教育学会編『教育学研究紀要』46 第2部 pp.355-360
- 寺澤陽美 (2007) “The use of spousal terms in Japanese: how wives refer to their husbands” (「日本語における配偶者の呼称について—妻は夫をどう呼ぶか—」) 愛知産業大学『愛知産業大学短期大学紀要』(20) pp.71-87
- 寺澤陽美 (2009) “The use of spousal terms in Japanese: how husbands refer to their wives” (「日本語における配偶者の呼称について—夫は妻をどう呼ぶか—」) 愛知産業大学『愛知産業大学短期大学紀要』(21) pp.111-113
- 早川いくを (2013) 『ウツ妻さん』亜紀書房
- 原田邦博 (2008) 「ジェンダーの視点から「呼称」を考える—新聞・放送に見る「女」と「男」—」『日本語とジェンダー』第8号 pp.32-35
- 文化庁 (1999) 『平成10年度 国語に関する世論調査』大蔵省印刷局 pp.52-56
- 松村明編 (2006) 『大辞林 第三版』三省堂
- 水本光美 (2010) 「改まった場における他人の配偶者の呼び方」『日本語ジェンダー学会』
<https://www.gender.jp/gender-essay/essay201003> (2017年7月10日閲覧)
- 柳田明子 (2015) 「夫さん妻さんキャンペーン」『フリーの社会福祉士 柳田明子のひとりごと』
<http://a-yanagida.asablo.jp/blog/2015/08/21/7738832> (2017年7月20日閲覧)
- 米田正人 (1987) 「夫婦の呼び方—アンケート調査の結果から」『言語生活』7月号 筑摩書房
pp.18-21
- 読売新聞「「主人」「ご主人」の代わりに何と言う？」2010年10月18日付「Yomiuri Online 発言小町」
<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2010/1018/356528.htm> (2017年7月1日閲覧)
- 読売新聞「自分の夫は「夫」。では相手の夫はなんと呼ぶ？」2015年9月25日付「Yomiuri Online 発言小町」
<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2015/0925/731974.htm> (2017年7月1日閲覧)

[付録]

本稿のアンケート調査の内容は以下のとおりである。

ご協力ありがとうございます。

日頃、家族や友人などの近しい人ではなく、あまり親しくない間柄の人と配偶者のことを話す際、日本人がどのような言い方をするか、またそれらの言い方に関してどのように考えているかについて研究しています。日本人の皆さんが実際にどのような表現を使ってらっしゃるか教えて下さい。

★回答は送信後編集可能です。しかし、別の回答を何度も送ることがないようにお願いします。

★現在は独身でも、結婚していたときの事、あるいは、自分が結婚していたらということを想定して、ご回答願います。

★アンケート分析結果は、しかるべき時期に、facebook の私のタイムライン上、mixi 日記などで発表します。 <https://www.facebook.com/terumi.mizumoto>

ご協力心より感謝します。

H28 年 3 月 12 日 北九州市立大学 水本光美

(性別、年代、職業などについての回答者の基礎情報に関する質問は省略)

5. あなたは、親しくない人に向かって自分の配偶者のことを話す際、どう言いますか。*

相手が自分の配偶者の名前を知らない場合です。最も多く使う表現を一つ選択して下さい。

- ☐ 夫
- ☐ 妻
- ☐ 主人
- ☐ 家内
- ☐ 旦那 (さん)
- ☐ 嫁さん
- ☐ 女房
- ☐ うちの奴、うちの人、うちの
- ☐ パートナー
- ☐ 連れ合い
- ☐ 伴侶
- ☐ その他:

6. あなたは、親しくない人の男性配偶者のことを話す際、どう言いますか。*

相手の配偶者の名前を知らない場合です。最も多く使う表現を一つ選択して下さい。

- ☐ ご主人 (さま)
- ☐ 旦那さん (さま)
- ☐ (お) 婿さん
- ☐ (お) 連れ合い (さま)
- ☐ パートナー
- ☐ その他:

7. あなたは、親しくない人の女性配偶者のことを話す際、どう言いますか。*

相手の配偶者の名前を知らない場合です。最も多く使う表現を一つ選択して下さい。

- ☐ 奥さん（さま）
- ☐ 奥方
- ☐ （お）嫁さん
- ☐ （お）連れ合い（さま）
- ☐ パートナー
- ☐ その他:

8. もし、あなたと話している相手があなたの配偶者のことを「パートナー」と言ったら、どう感じますか。*

- ☐ 別に構わない
- ☐ 一瞬、え？誰の事？と考えてしまう
- ☐ そのような言い方に違和感を感じる
- ☐ その他:

9. もし、あなたと話している相手があなたの配偶者のことを「お連れ合い（さま）」と言ったら、どう感じますか。*

- ☐ 別に構わない
- ☐ 一瞬、え？誰の事？と考えてしまう
- ☐ そのような言い方に違和感を感じる
- ☐ その他:

10. あなたと話している相手があなたの配偶者のことを「夫さん」や「妻さん」と言ったら、どう感じますか。*

- ☐ 別に構わない
- ☐ なぜ、そのような言い方をするのか不思議
- ☐ そのような言い方をすることに違和感を感じる
- ☐ その他:

11. あなたと話している相手があなたの配偶者のことを「夫の方」や「妻の方」と言ったら、どう感じますか。*

- ☐ 別に構わない
- ☐ なぜ、そのような言い方をするのか不思議
- ☐ そのような言い方をすることに違和感を感じる
- ☐ その他:

12. このアンケートに関して何かご感想などありましたら、ご自由にお書き下さい。